

宮城野

MIYAGINO

トラックもまたライフライン

いすゞ自動車東北(株)宮城支社長 湯村 愉吉

私たちは、あの未曾有の震災被害を経験し電気、ガス、水道などのインフラとは如何なるものかを考えさせられました。同時にトラック輸送もまた重要なライフラインであることを経験する事となりました。津波で寸断され瓦礫と化した町並みを緊急自動車や生活支援物資を運搬するトラックは生活の維持に欠かすことの出来ない働きを示してくれました。

私どもトラック販売店は、その当時、救助や救援を担う車両を決して止めることの無い様、整備体制を取りましたが、現実には社員自身が被災して出勤できない、燃料切れで動けないなど人的問題と、工場内ではリフトから転落した大型トラックなどで現場の復旧に時間を要するなどして、使える設備と動ける人材で体制維持を図ったため、災害時の復旧車両の整備フォロー体制に欠陥を感じ、社員には相当の負担をかけたことを思い出します。

現在、当社が立地する宮城野区中野4丁目は、震災時にはおおよそ50cmほどの津波の浸水地域で、震災以前から移転が計画されており、震災翌年の5月に竣工した工場です。

自動車分解整備事業にはリフトは欠かせない設備ですが、当時の経験を活かし、整備内容に応じては油圧で持ち上げるタイプのリフトだけではなく、車両は平地そのままに、工場床面が降下するフロアリフトの設定を拡大して整備しました。このリフトは降下した地下室に作業スペースを確保しておりますので、入庫車両の存在に関係なく十分な作業領域が確保されていますし、高所からの転落事故等もありえませんが緊急事態の発生時には大型小型併せて4ストールの緊急稼働が可能となっております。但し、地下室ですので津波発生となれば即避難が必要です。

津波避難に関しては、社屋内避難を想定して、事

務棟屋上に約200名程の避難耐荷重を設定しております。当時震災は日の出町の旧社屋で被災したわけですが、当日は停電等で状況がつかめず午後4時くらいになって帰宅指示を出しました。当社の社員は多賀城・塩釜地区からも多数通勤しておりまして、震災直後に帰宅の途につかせていたら、停電で信号機の消えた路上で渋滞し、津波被害に巻き込まれていたのではないかと想像するとぞっとする思いでありました。当社の現在の中野地区従業員数は約170名程ですが、地震発生時には車移動を禁じ、事務棟2階へ避難することとしておりますし、2階でも危険が迫れば屋上へと避難を進める事としております。また、工場棟にも避難領域があり、工場2階に設置してある居住スペースは実質3階建てと同等の高さにありますので、これだけのスペースを有効に活用すれば当社の社員避難だけではなく、隣接するうみの杜水族館付近の歩行者や近隣建物の避難者も受け入れられるものと思っております。そして最後に反省です。今回の寄稿でこの6年間を振り返り、震災被害の対応策と備品備蓄の状況を確認いたしましたところ、震災は過去のものとなっており、まさに「天災は忘れたころにやってくる」の思いを強くしました。当時多くの救援・支援物資を全国のいすゞグループより大量に賜り、社員一同感動に震えたことを思い起こします。そしてこれらの物資を克明にリスト化し、備蓄するべきものをリスト化し対応してきたつもりですが、一般倉庫の一角を保管に充てたせい、とても備蓄しているものとは思えない状態となっております。備蓄のノウハウはリストによる物資の世代管理等も重要ですが、人事異動などでのその引継ぎなどもしっかり取り決めておくことが重要です。今回この反省の機会を得て、体制の維持と戒めを一層図って参りたいと思っております。



屋上避難



工場棟避難



全景



大型二連フロアリフト